

〈原著論文〉

スペシャリストの実践見学・患者体験を通して得た看護学生の学び －呼吸器，神経・筋疾患専門病院実習アンケートの分析－

Learning of nursing students through the practice of the specialist and simulated patient experience : Analysis of the questionnaires on the training at the respiratory and neuromuscular disease special hospital

隍 智子¹，石井 あゆみ²，中尾 友美³

要旨

目的：呼吸器，神経・筋疾患専門病院実習におけるスペシャリストの実践見学と患者体験から得られた看護学生の学びを明らかにする。**方法：**看護学部3年生で慢性看護学実習を履修した102名のうち、研究参加の同意が得られた81名の実習後アンケートの自由記載から、見学・体験実習の学びに関する記述を抽出し、質的帰納的に分析した。**結果：**学生は【呼吸器専門の知識・技術】【患者と向き合う看護師の態度・姿勢】【慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響】【慢性呼吸不全患者の生活】【呼吸器，神経・筋疾患専門病院特有の療養環境】について学んでいた。**考察：**スペシャリストの実践見学と患者体験は、知識と実践を統合する力や、患者を生活者として捉える視点を得ると同時に、指導者をロールモデルとして捉え、看護師として求められる態度や倫理観を養うといった効果に繋がっていたと考える。

キーワード：呼吸器疾患，看護学生，スペシャリスト，患者体験，ロールモデル
respiratory disease, nursing student, specialist, simulated patient experience, role model

I. 緒言

看護系大学の増加に加えて看護教育の質の保証に関する社会的関心の高まりを受け、2010年より日本看護系大学協議会を中心に学士課程の教育方法について検討され、講義・演習・実習を通して看護専門職に必要とされる知識や技術、課題解決能力といった看護実践力の習得に関する指針が報告されている（日本看護系大学協議会，2018）。看護教育における教育方法の中でも、講義や演習での学びを実践しフィードバックする実習は非常に重要であるが、学生がより効果的に学習を進めるためには指導体制や指導内容が問われる。

大学における看護学実習指導方法については、看護学実習ガイドライン（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会，2020）が示されており、実習施設の役割の一つとして、実習指導

者が看護の実践者として役割モデルとなることを挙げている。また、日本看護協会は、特定の看護分野における熟練した看護技術や知識を持って水準の高い看護実践ができる認定看護師や専門看護師の役割の一つとして、看護者の看護ケア能力を高める指導を挙げており、臨床におけるスペシャリストの実践が看護者のロールモデルとなることが報告されている（森島，2017；宮川ら，2017）。豊富な知識と熟練した技術、アセスメント力、判断力、コミュニケーション力などを持つ専門看護師・認定看護師（以後、スペシャリストとする）の看護実践は、看護学実習において看護学生のロールモデルとなり、看護実践力の習得につながると考えられる。

本学の慢性看護学領域では、学生が対象を多面的・統合的に捉える基礎的能力の他、日常生活支援およびセルフケア確立にむけた看護実践能力や

1 Motoko HORI 千里金蘭大学 看護学部 看護学科
2 Ayumi ISHII 千里金蘭大学 看護学部 看護学科
3 Tomomi NAKAO 千里金蘭大学 看護学部 看護学科

受理日：2021年9月2日

査読付

看護専門職として必要な態度、慢性期および終末期看護の理解等を深めることを目的として、臨地実習を実施してきた。

しかし、2020年度初頭から続いている新型コロナウイルス感染の流行により、学生は患者との対面だけでなく、医療施設内に入ることすら困難な状況下であり、実習形態の変更が余儀なくされている。文部科学省(2021)は、コロナ禍において臨地でしか学ぶことができない教育内容を明確にする必要があるとし、臨地の場合は学生が看護専門職として働くイメージを作り上げ、自身の看護実践能力を吟味し、社会人基礎能力を育成する場であるとしているように、医療施設での対面実習に制限がある中でも、学生が五感を使って看護実践を学ぶ実習の場が必要であると考えた。

そこで、これまでの医療施設で受け持ち患者を持ち看護過程を展開する実習から、高度な看護実践力を持つスペシャリストの看護実践を聴くことや、患者の治療・療養生活の観察や体験を行う実習へと変更することで、学生は臨地でしか得られない実践知や慢性期看護への理解を習得できるのではないかと考えた。

本研究では、学生が実習施設でのスペシャリストの実践見学と患者体験から得た学びを分析し、今後の教授方法に関する知見を得ることとした。

II. 目的

呼吸器、神経・筋疾患専門病院におけるスペシャリストの実践見学と患者体験から学生が得た学びを明らかにすることを目的とする。

III. 研究方法

1) 研究対象

看護学部3年生で慢性看護学実習を履修した102名

2) 実習プログラム

2020年8月、呼吸器疾患や神経・筋疾患の患者が入院治療を行っている医療施設にて実習を行った。実習内容は、学生実習を担当する慢性疾患看護専門看護師と協議を重ね、①慢性疾患看護専門看護師、緩和ケア認定看護師の講義、②在宅酸素療法(HOT)、非侵襲的陽圧換気療法(NPPV)の機材操作や酸素マスクの使用に関する患者体験、

③理学療法士・作業療法士によるリハビリテーションや自宅を想定したADL室の見学、④病棟における吸引や入浴などの患者ケア見学及び患者との対談、を1日の実習プログラムとした。学生は20~21人のグループに分かれ、1日1グループ、5日間で計102名が出席した。実習期間中はCOVID-19の流行時期であったため、患者への介入や患者体験における酸素マスクの装着等は行わず、感染対策を講じての実習とした。

3) データ収集方法

実習終了後、「呼吸療法に関する見学または体験内容を問う質問7項目」「専門看護師・認定看護師の講義に対する感想や学び」「見学や体験から得た学び」「実習の感想」で構成されたWebアンケートを実施した。履修者102名からアンケートを回収した後、対象者全員に研究説明を行い、81名から研究参加の同意が得られた。本研究では、研究目的であるスペシャリストの実践見学と患者体験から学生が得た学びを分析するため、実習プログラム②③④における学びが記載されている「見学や体験から得た学び」の内容を分析対象データとした。

4) 分析方法

まず、学生の自由記載内容を熟読し、文章を意味内容毎に区切り、「見学や体験から得た学び」のコードを抽出した。次に、類似性からサブカテゴリーを作成し、さらに抽象度を上げてカテゴリーを作成した。分析は看護研究者3名で行い、意見が一致するまで検討を重ねた。

5) 調査期間

調査期間は2020年8月~2021年2月である。

6) 倫理的配慮

本研究は千里金蘭大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(K20-017)。また、対象者に対して研究の主旨の他、研究への不参加によって不利益はないこと、データは適切に管理・破棄することなどを文書及び口頭で説明をした。

IV. 結果

慢性看護学実習を履修した102名のうち、研究参加への同意が得られた81名(回収率79.4%)の自由記載を内容毎に区切り、計123個のコードが抽出さ

スペシャリストの実践見学・患者体験を通して得た看護学生の学び

表1 スペシャリストの実践と患者体験及による学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー (コード数)	代表的なコード
呼吸器専門の 知識・技術	酸素療法中の 患者へのセルフケア 支援 (14)	在宅酸素療法を導入している患者も、導入後の生活はとても快適であり、行動範囲も広がったと話している事から、導入した事による患者へのメリットが大きい事もわかる。
		実際に体験したことがなかったので患者さんが感じる思いを少しでも感じることができました。そのことを忘れずに耳の後ろや鼻に発赤はないか、痛くないかを気にしながらスキンケアや保湿をおこなっていきたくと思った。
		体験した中でHOTの生活上での違和感や操作の難しさがとても印象に残った。HOTは在宅の授業等で写真は見ただけだったが、実際にそれを持って移動すると歩きにくかったり、管の扱いの難しさが体験できた。不便さから酸素療法を外したくても外せない患者に、看護師はどのように介入してどのように移動時の援助をしていくかが大切だと感じた。
		今まで想像する事は無かったのですが、今回の実習を通して実際に酸素マスクをつけて生活をする事を想像すると、ストレスを感じる事も多々あったり、不慣れな事があったりと影響が大きく出てくると感じました。看護師としてその負の影響をどのように軽減、緩和出来るのかを患者さんと意見を交えてともに考え、解決策を考える事で「その人らしい暮らし」をサポート出来るのではないかと学びました。
コミュニケーションが 困難な患者への 工夫 (8)		患者さんのケアの見学では、気管切開をしている患者さんとのコミュニケーションの取り方も学ぶことができた。発語は出来なくても口を動かせたり、瞬きで理解したり、コミュニケーションボードを使ったりと様々な方法があり、最初は難しいかもしれないが、患者さんの訴えや思いを理解するためにも、コミュニケーションというのは重要だと感じた。
		言葉だけがコミュニケーションだけでなく、僅かな目の動きや、心拍の値で患者と意思の疎通を行っている姿を見て、もっと患者のことをよく見る必要があると感じた。
		透明の文字盤から患者の目の動きに合わせて伝えたい事を読み取るのは、短い言葉なら読み取りやすいが、実際の患者は長いことを伝えられることも多いようで、それを読み取ることができるようになるには、患者との関係性の構築がないとできないのだと感じた。
		口唇で押すナースコールは、遠すぎても近すぎても意味をなさないので、一人ずつ異なる適切な位置を探らなければならないということを知り、観察と患者への確認が重要なのだとわかった。
酸素療法のデバイス の使用・特徴 (8)		酸素マスクやカニューレは大学の演習でも使用したことがあるが、様々な種類を触って比較したり、実際に体験してみることで今まで学習してきたことをどのようにしてするのかを学ぶことが出来た。
		酸素マスクやカニューレは酸素流量や、用途、患者にあったサイズなどいろんな視点から患者にとって最適なものを選択するために、たくさんの種類があることがわかった。
吸引・排痰技術 (5)		実際の患者への吸引など、学校では学べない事をたくさん学ぶ事ができた。見学や体験を行う事で新たな発見をする事ができた。
		呼吸器をつけている方を早期体験等でも少しは見たが吸引等のケアをしているのは初めて見て、痰の色や粘稠度の違い等も見られた。
		カフアシストははじめてみたケアで、非常に衝撃的だった。強い空気を送って引くことで咳嗽を促すような機器であると説明を受け見学した。機器から空気が送られると、患者の胸郭が大きく動き、患者にとって非常に侵襲の大きいケアなのだと感じた。
知識に基づいた看護 実践 (3)		看護師さんによると、酸素マスクや鼻カニューレの種類や特徴など全て覚えているとのことであった。実際に使用するのは患者さんであるからこそ、看護師が利点や使い方など細かい知識も得て、説明できる、判断できるようにしていかななくてはならないのだと学んだ。
		看護師はケアを行う際、何故そのタイミングに行うのか患者の表情やバイタルサインから考えていた。ケアを行う際に根拠を持って行っていることを学べた。酸素マスクやNPPVは皮膚トラブルが多く、保湿を行う、圧のかかる場所を少しずらすなど看護師の微調整により予防していた。
		コミュニケーションの取れない患者の看護では、バイタルサイン等が判断の基準となるため、看護的視点がより重要であると学びました。
患者と向き合う看護 師の態度・姿勢	患者の話をしっかりと 聴く (11)	実際病棟で看護師の方々はずごく忙しそうにされていたが、中でも患者の声に耳を傾けて、患者の意向に沿って行動されていた事に、患者の事を考えて行動する事の大切さを改めて感じさせられた。
		看護師は、患者の先を見据えた看護を行う必要がある、その人の生活スタイルを考慮した看護計画を立てなければならない。そのためにはその患者を理解するということが必要となる。患者の全てをわかるということは困難であるが、患者の発言に傾聴し共感的に接することが重要となることがわかった。
		患者の声に耳を傾け、些細な表情や言動、行動の変化に気づき、患者を想うことが大切であると学んだ。
		余命の話をしたとき、声を少し荒げ話す姿に心が痛み、苦しくなった。このような後悔や苦しみを、少しでも軽減し、また予防に働きかけられることができるような看護師になりたいと強く思った。
その人らしい生活 を支える (9)		機器の導入が患者の生活にとって良いものとなるよう、適切な情報提供と意思決定の支援が大切であると学ぶことが出来た。
		事例紹介でも、仕事をしなくても呼吸器をつけながらはできないと考える患者さんに、仕事をしながらでも酸素療法ができるリハビリなど、酸素療法を拒む患者さんの背景には何があるのか知り、その人の生活に合うように考えていくことが大切だと学んだ。
		症状を自覚してもらい、その際の感情を伝えてもらい、その事をアセスメントする事で行動変容を促す事ができるきっかけを見つける事につながる事や、治療を受け入れられるような関わりが重要だと言う事を学んだ。
退院後の生活を考 える (6)		病棟だけでなく退院後の生活も視野に入れて、間取りや患者さんの行動範囲などもアセスメントする必要性を理解することができた。
		在宅に戻った時のことを考えた関わりが必要であり、ADL室での訓練や酸素濃縮器や酸素ポンプの使用法の指導など、退院後も継続して自己にて行えるよう支援する必要があると分かった。

カテゴリー	サブカテゴリー (コード数)	代表的なコード
慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響	慢性呼吸不全と共生する苦悩 (12)	患者さんのお話から、自分の病気や入院生活で困っていることは、身近で自分の状況を見ており、病気について理解している人しか、本当の自分の思いを伝えることができないという患者さんの気持ちを知ることができた。看護師はそれに寄り添い、看護していく必要があると学んだ。
		呼吸器を着けることに対して、すぐに受け入れられない方も多く、それまでにはさまざまな葛藤や悩みがたくさんあると知った。
		今回の実習で特に印象に残ったのは、終末期の方がどれほどの事を諦めて、最期を迎えることに恐怖を感じているのか、事例、患者さんの話を聞いて、強く印象に残った。表向きでは楽しくお話ししてくれる患者さんだったが、いざ余命の話をした時の「怖かった」と話す表情からも、ほんとに計り知れない恐怖と戦っている方だと感じた。
	酸素療法による患者の身体への影響 (5)	事前学習の段階で想像していた以上に労作時というものがある細かい動作であったり、呼吸器疾患患者は酸素飽和度が下がるのが早かったり、酸素マスクが窮屈であったり、増木が当たる部分で硬くて負担であったり、実際に行われているケアでは教科書に書いていないような効率の良い方法で患者への負担を軽減する工夫がされていたりと様々なことを聞いて、見て、触って学ぶことができた。
		酸素マスクやNPPVは実際体験してみると風圧が強くなった。鼻の乾燥や皮膚トラブルにもつながるため、保湿の大切さを改めて学んだ。
慢性呼吸不全患者の生活	酸素療法による日常生活の不便さ (9)	実際に酸素を持ってみると想像してたよりも重かったり、NPPVに関しては風量が強くこれが顔に当たると思うと恐怖を感じると思った。
		在宅酸素療法では、講義では聞いていたものの、どのようなものなのかあまり想像が出来ていなかったが、実際に酸素ボンベを持ち歩いてみて、日常生活の中で酸素が常に必要な生活では、不便なことたくさんあるという事が分かった。酸素ボンベ自体も重量があり、外出するのは大変だと感じた。また、在宅酸素療法では、患者さんが操作を行うため、患者さんの理解度なども重要であることが分かった。
		実際に酸素療法を行っている方から話を聞くことで、自分たちが酸素療法について学ぶだけではわからない、日常生活での不便さや、酸素療法に対する思いを聞くことで、酸素療法についての知識だけでなく、それを受ける側の立場になって考え、より酸素療法についての学びを深めることが出来た。
	病院が生活の場となっている慢性呼吸不全患者の日常 (6)	病棟の見学ではそれぞれの患者さんの生活が見え、入院しながら酸素療法などの治療を受けながらも、病院内でゲームをしたり仕事をしたり、それぞれが日常生活を送っていらっやっした。病院内が患者さんの生活を送る場所であり、看護師はそれを支えていけるようにしていかななくてはならないと改めて学んだ。
		実際の患者さんの部屋を見学させてもらったとき、少しの筋肉しか動かすことができないが、その少しでも動く場所を最大限に活かしてナースコールを工夫したり、ゲームやネットを使えるように特殊なコントローラーなどを用意したりなど、初めて見るものばかりでとても良い経験をする事ができた。
医療入院だけではなく契約入院として一生をこの施設で過ごす方もたくさんいて、少しでも楽しんでもらうために工夫していることがたくさんあることを知ることができた。		
呼吸器、神経・筋疾患専門病院特有の療養環境	多様な生活補助具 (5)	見学時にナースコールが一般の病棟とは違って、種類が豊富であることに気づいた。今まで、ナースコールは一般的なものしかないと思っていたが、ここの病院は、患者さんに合わせた形を作業療法士が調整して、このように豊富な種類があるということがわかった。私は、このように種類があることを知らなかったのも、もし知識がないまま一般的なナースコールが使えない患者に出会った時何も提供できないと思った。このような知識がある事で、患者のニーズに沿ったツールが提供できるし、今後はもっと自分からいろいろな患者の状況を想定して、その対象が不便と感じていないかということを考えて関わりたいと思った。
		神経内科の病棟を見学をしたときに患者が使用している車椅子を見させていただいたのですが、それぞれ、大きさや形、機能、デザインが異なっていて、患者に合わせたものが使用されていることを知りました。また、筋ジストロフィーなどを患い、四肢が不自由な患者のために1人1人に合わせたナースコールを作成し、設置されていることを教えていただきました。これらのことから、患者の個性を大切に看護することが大切であることを、学ぶことができました。
		患者の残存機能を活かすために、ナースコールや、リモコンの形状、配置の工夫がされていて、一人一人に合わせた工夫がされていた。また、クッションの大きさやそれらの当て方も異なっていた。患者さんが安全・安楽に過ごすことのできる工夫が行われていることが理解できた。
	慢性呼吸不全患者の療養に特化した施設 (4)	リハビリテーションの機械など多くのものがあり、それぞれの患者さんに合わせて支援でき、個別性の看護に繋がっていると感じた。
		在宅での酸素療法について学びを深める事ができた。また、呼吸器疾患の病棟では酸素や吸引の中央配管が食堂スペースにまで配置してある事や、神経・筋疾患の病棟ではミスト浴があるなど病棟の特徴を学ぶ事ができた。
実際にさまざまな種類のナースコールが使用されていることや、酸素療法、ADL室で入院中の患者さんが日常生活に戻るための訓練が行われていることを知り、体験することを学ぶことができた。		
多職種連携 (2)	病棟で患者が浴室へ移動する場面を見学した。移動前に臨床工学技師が人工呼吸器の点検をしていた。看護師も人工呼吸器について勉強し、異常があれば伝えられるようにする必要があった。	
	呼吸器リハビリテーションは作業療法士や理学療法士の職種の方が主に行っていることが分かった。	

れた。さらに、記載内容が抽象的なものや感想に留まっているもの16コードを除外し、計107コードを分析対象とした。

分析の結果、107コードから15サブカテゴリー、5カテゴリーを生成した。(表1)

以後、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、コードを「 」で示す。

1) 呼吸器専門の知識・技術

【呼吸器専門の知識・技術】では、<酸素療法中の患者へのセルフケア支援><コミュニケーションが困難な患者への工夫><酸素療法のデバイスの使用方法・特徴><吸引・排痰技術><知識に基づいた看護実践>の5つのサブカテゴリーが抽出された。学生は酸素療法中の体験をする中でストレスや生活の不便があることを実感し、<酸素療法中の患者へのセルフケア支援>の重要性とその方法を考えていた。また、病棟見学等を通して、看護師が行う<吸引・排痰技術>や、使用する器具や実施するケアについて<知識に基づいた看護実践>を見て学んでいた。さらに、言語的コミュニケーション以外に、文字盤の使用や患者の表情、バイタルサインなどから患者の訴えや思いを読み取る<コミュニケーションが困難な患者への工夫>について学んでいた。また、学内では目にすることがなかった<酸素療法のデバイスの使用方法・特徴>について実際に様々なデバイスに触れながら説明を受けることにより、器具に関する新たな知識を得ると共に、患者にとって最適なデバイスを選択する看護師の役割に気づいていた。<吸引・排痰技術>は講義や学内演習で取り入れていたが、熟練した技術が患者に与える効果や患者に負担をかけない手際の良さを間近で見て、改めてその重要性を認識していた。さらに、看護師が看護ケアを行っている様子から、一つ一つの患者アセスメントや看護ケアは、<知識に基づいた看護実践>であることを再確認していた。

2) 患者と向き合う看護師の態度・姿勢

【患者と向き合う看護師の態度・姿勢】では、<患者の話をしっかりと聴く><その人らしい生活を支える><退院後の生活を考える>の3つのサブカテゴリーが抽出された。学生は、患者が語った体験談や、彼らに対する看護実践の見学から、<患者の話をしっかりと聴く>ことで患者に対する理解が深まると同時に、その看護師の態度や姿

勢が患者の安心感やより適切な看護支援につながることを学んでいた。また、どのようなサポートや情報があれば患者が希望する生活を送れるのかを考えている看護師の姿勢から、<その人らしい生活を支える>ことや、<退院後の生活を考える>ことが、今後慢性呼吸不全と共に生きていく患者に対する重要な支援であると理解していた。

3) 慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響

【慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響】では、<慢性呼吸不全と共に生活する苦悩><酸素療法による患者の身体への影響>の2つのサブカテゴリーが抽出された。学生は患者から体験談を聞き、患者は慢性呼吸不全という疾患や治療について、葛藤や悩みを抱えながら徐々に受け入れていくことを知り、<慢性呼吸不全と共に生活する苦悩>を学んでいた。また、実際に酸素療法で使用するデバイスを使用してみることで、<酸素療法による患者の身体への影響>を体感すると同時に、その影響に対して必要とされる看護について考えていた。

4) 慢性呼吸不全患者の生活

【慢性呼吸不全患者の生活】では、<酸素療法による日常生活の不便さ><病院が生活の場となっている慢性呼吸不全患者の日常>の2つのサブカテゴリーが抽出された。患者が実際に使用している酸素療法の器具に触れることで、<酸素療法による日常生活の不便さ>を身を持って体験し、患者が直面する困難についてより具体的に考えることができていた。また、慢性呼吸不全患者が入院している病棟を見学したことで、<病院が生活の場となっている慢性呼吸不全患者の日常>を目の当たりにし、疾患の治療を積極的に行う急性期病院などとは異なり、看護師には患者の日常生活を支える役割がより重要となることを学んでいた。

5) 呼吸器、神経・筋疾患専門病院特有の療養環境

【呼吸器、神経・筋疾患専門病院特有の療養環境】では<多様な生活補助具><慢性呼吸不全患者の療養に特化した施設><多職種連携>の3つのサブカテゴリーが抽出された。神経・筋疾患患者が使用する患者の個別性に合わせた特殊なナースコールや車椅子等の<多様な生活補助具>を見学し、患者の療養生活を支えるためには患者が持

つ身体的機能を捉えて調整された道具が必要であることを学んでいた。また、リハビリテーション室や病棟において、各所に設置された酸素吸入設備や呼吸器リハビリテーションに使用する機材等を見学し、患者の呼吸状態に合わせて対応できる〈慢性呼吸不全患者の療養に特化した施設〉の特徴を捉えていた。さらに、院内を見学する中で様々な専門職が患者の療養環境を支えていることを知り、〈多職種連携〉の重要性に気づいていた。

V. 考察

看護学実習ガイドライン（大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2020）では、看護学実習の目的の一つとして、学生が対象者との関係形成を中核とし、多職種連携において必要とされる連携・協働能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを挙げている。また、看護学士課程教育における コアコンピテンシーと卒業時到達目標（2018）においては、「慢性・不可逆的健康課題を有する人を援助する能力」（以後、慢性看護学領域で習得すべき能力）として、①患者・家族の理解と疾患管理、②患者・家族の理解と療養生活支援、③患者と家族の生活を支える社会資源の活用、の3つについて、実施・説明できることを目標としている。

今回実施した実習において、学生は【呼吸器専門の知識・技術】【患者と向き合う看護師の態度・姿勢】【慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響】【慢性呼吸不全患者の生活】【呼吸器、神経・筋疾患専門病院特有の療養環境】について学んでいた。学生は、スペシャリストの臨床講義により呼吸器疾患に関する知識や看護実践を理解してから、施設見学、患者体験、看護ケアの見学、患者との対話を行ったため、効果的に慢性期看護に求められる視点や看護実践を学んでいたと考える。

そこで、本研究にて抽出された学生の学びのカテゴリーと看護学士課程における慢性看護学領域で習得すべき能力と照らし合わせ、1) 知識と実践の統合、2) 患者を生活者として捉える視点、3) ロールモデルとしての指導者、という3つの視点でスペシャリストの実践と患者体験による学生の学びとその効果について考察する。

1) 知識と実践の統合

学生の見学・体験実習による学びを見ると、【呼吸器専門の知識・技術】に関するコードが最も多く抽出されており、看護専門職として慢性呼吸不全患者を支援するための知識と技術の重要性を学んでいたと考えられる。特に知識に関しては、学内で既に学習した内容が臨床ではどのように活かされているのかを確認することができていた。さらに、自分が実際に援助するときにはどのように知識を活かすべきなのかまで考えることができており、実際に看護ケアを計画・実施することができない中でも、知識と看護実践をつなげるという過程を踏むことができていたと考える。泊ら(2020)は、患者について情報収集や気づきができるようになることと、そのようにできる思考方法の習得が重要であること、さらに実践では時間変化と対象者の反応の受け止め、考察、対応という複合的な課題が存在すると述べている。学生は、患者の症状や訴えを瞬時に判断して対応する看護師の実践を見学する事で、これらの複合的な課題への取り組みを代理体験し、慢性看護学領域で習得すべき①患者・家族の理解と疾患管理と②患者・家族の療養生活支援を実施・説明する能力を養っていたと考えられる。

2) 患者を生活者として捉える視点

学生は患者の生活に目を向ける重要性を学んでいた。【慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響】【慢性呼吸不全患者の生活】といったカテゴリーや〈その人らしい生活を支える〉といったサブカテゴリーに見られるように、患者を病と共に生きる生活者として捉える視点を学んでいたと考えられる。この視点は、看護学士課程教育における コアコンピテンシーと卒業時到達目標（2018）にも挙げられる、患者・家族の療養生活支援や生活を支える社会資源の活用を実施する上で特に重要であると言える。

学生が患者を生活者としてアセスメントする上で大きな影響を与えていた実習内容の一つに、患者体験があったと考えられる。西田ら(2018)は、看護学生のストーマ造設疑似体験演習における生活体験の分析から、学生は日常的に実施している生活行為が思う通りにできない困難感や困惑に気づき、患者が直面する生活上の問題への対処方法を考え、生活を再構築していかなければならないことを実感していた、と報告している。本研究においても、学生は酸素ボンベを持ち運ぶ体験や酸

素マスクに触れて風圧や音を体感した経験から、
 <酸素療法による患者の身体への影響>や<酸素療法による日常生活の不便さ>を実感し、「看護師としてその負の影響をどのように軽減、緩和出来るのかを患者さんと意見を交えてともに考え、解決策を考える事で「その人らしい暮らし」をサポート出来るのではないか」といった<酸素療法中のセルフケア支援>をより具体的にイメージすることができていた。

3) ロールモデルとしての指導者

慢性看護学領域で習得すべき能力でも挙げられているように、慢性疾患と共に生きる患者と家族を看護する上で、患者と家族のこれまでの人生や生活、価値観などを理解して療養生活支援につなげる力は非常に重要である。学生は、この能力に関する学びとして、真摯に対応するといった【患者と向き合う看護師の態度・姿勢】と、学生自身が目指す看護師像を照らし合わせていたと捉えることができる。鈴木ら(2019)によると、看護学実習において学生の意欲向上の一因として、看護への熱心さを感じる指導者を尊敬する思いが挙げられる。また、学生が臨床の看護師や実習指導者をロールモデルとして捉え、看護実践の目標、看護師の役割や価値を実感するといった、実習指導者のロールモデル効果に関する先行研究(松井ら, 2000;志賀ら, 2003;溝部ら, 2007)がなされている。熟練した看護技術や幅広い知識と経験を持つ看護師をロールモデルとすることは、看護学実習ガイドライン(大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2020)に示されている高い倫理観と自己の在り方を省察する能力や看護師として求められる態度を学ぶ上で特に高い効果が期待できると考える。

さらに、臨地実習指導者が看護実践において患者の生活背景や治療と闘っている患者の理解に関してロールモデル行動を示すことで、学生は患者を一人の人間として理解していくことができる(新井, 2015)とされているように、学生は患者を生活者として捉えて援助を行う看護師をロールモデルとし、自己の学びにつなげていたと考える。

VI. 結語

呼吸器, 神経・筋疾患専門病院における見学・患者体験を通して、学生は【呼吸器専門の知識・

技術】【患者と向き合う看護師の態度・姿勢】【慢性呼吸不全が患者の心身に与える影響】【慢性呼吸不全患者の生活】【呼吸器, 神経・筋疾患専門病院特有の療養環境】について学んでいた。これらの学びは、知識と実践を統合する力や、患者を生活者として捉える視点を得ると同時に、指導者をロールモデルとして捉え、看護師として求められる態度や倫理観を養うといった効果に繋がっていたと考える。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は呼吸器, 神経・筋疾患専門病院1施設で実施した実習の学びを記述した内容を分析しているため、見学・体験実習の学びとして一般化するためには特徴の異なる施設での調査が必要であると考えられる。また、実習内容に含まれていた専門看護師・認定看護師の実践事例に関する講義については今回の分析に含めていないため、その影響についても考慮して今後の教授方法を検討していく必要がある。

謝辞

大変お忙しい中、本学の実習にてご指導下さいました呼吸器, 神経・筋疾患専門病院のスタッフの皆様、学生に体験談をお話し下さいました患者様に心より感謝申し上げます。また、本調査にご協力頂きました学生の皆様に御礼申し上げます。

文献

- 新井紗樹子. (2015). 臨地実習指導者による看護実践のロールモデル行動. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 11(1), 19-26
- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. (2020). 看護学実習ガイドライン. https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf (2020年12月21日閲覧)
- 松井英俊, 佐藤敦子. (2000). 臨地実習でロールモデルとなる看護婦・看護師から影響を受けた学生の関心. 日本看護学会論文集: 看護教育, 31, 137-139
- 宮川操, 片岡睦子, 飯藤大和, 安原由子, 谷岡哲也, Rozzano C. Locsin. (2017). 新卒看護師が入職する精神科病院の特徴. 四国医誌, 73(1), 2,

71-78

- 溝部佳代, 鷺見尚己, 武藤眞佐子. (2007). 周手術期看護学実習における手術室実習の有効性
学生の手術室看護に関する学びと態度の変化より. 看護総合科学研究会誌, 10(1), 3-14
- 文部科学省. (2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afiedfile/2017/10/31/1397885_1.pdf (2020年12月21日閲覧)
- 文部科学省. (2021). 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議報告書. https://www.mext.go.jp/content/20210608-mxt_igaku-000015851_0.pdf (2021年8月30日閲覧)
- 森島千都子. (2017). 日本の救急外来における看護師教育の現状と課題. 兵庫医療大学紀要, 5(1), 35-43
- 日本看護系大学協議会. (2018). 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標.
<https://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf> (2020年12月21日閲覧)
- 西田三十一, 榎本麻里. (2018). 看護学生のストーリー造設疑似体験演習における生活体験からの学び. 聖徳大学研究紀, 28(50), 135-142
- 志賀厚子, 池本滋子. (2003). 小児看護学実習におけるロールモデルによる指導 学生の反応と学習上の効果, 看護展望, 28(10), 1172-1177
- 鈴木由紀子, 佐藤直美. (2019). 看護学実習における指導者・教員との相互作用で学生の学びの意欲が高まる様相. 日本看護医療学会雑誌, 21(2), 1-12, doi : <https://doi.org/10.11477/mf.7009200307>
- 泊祐子, 大西文子, 竹村淳子, 西蘭貞子, 川島美保. (2020). 小児看護学実習において「実践と理論の統合」を必要とする学習課題の構造. 日本看護科学会誌, 40, 474-483, doi : 10.5630/jans.40.474